

『アフガニスタン史小景』に寄せて

関根 正男（アフガニスタン文化研究所副代表）

アフガニスタンの歴史について、アフガニスタン人自身による歴史・政治史の邦訳は、私の知る限り極めて少ない。僅かに、『アフガニスタンのハザーラ人』（サイード・アスカル・ムーサヴィー著、明石書店）があるのみである。その意味で、この『アフガニスタン史小景』は、貴重なものであり、「歴史」を理解する上でまとまりのある「小冊子」となっている。

構成は、

「第1章 王朝と帝国 アレクサンドロスからバーブルまで：征服と文化的融合

「第2章 ドウッラーニー帝国の台頭 アフマド・シャー・ドウッラーニー：建国の王

「第3章 ザ・グレート・ゲームの激化 イギリスの策謀とバラクザイ朝

「第4章 改革の新たな夜明け 近代化と苦闘——アフガニスタンのアイディンティティ探求

「第5章 王たちの幕間 ハビブッラー・カラカーニーとナーディル・シャーの短い治世

「第6章 最後の君主 ザーヒル・シャー王の台頭：叔父立ちの苛烈な支配から改革への模索へ

「第7章 共和国の夜明け ダーウード・ハーンの構想と課題

「第8章 終章 大使任命と回想 過去からの教訓と未来への希望

「第1章」では、今日のアフガニスタンの地は、遠くは、ゾロアスター教、アケメネス朝、アレクサンドロスの遠征、スキタイ、パルティア、クシャーナ朝、エフタル、サーサーン朝、イスラームの到来、サーマン朝、ガズナ朝、ゴール朝、ジンギス・カーンの侵略、ティムール朝、バーブルの支配までを取り上げる。

このようにたどると、いかにアフガニスタンの地が、さまざまな民族が入り乱れ、戦乱の地としてありづけてきたかをみることができる。まさに「文明の十字路」であり、「戦いの十字路」でもあったことがわかる。

「第2章」で、ドウッラーニー帝国成立の前史から、バラクザイ朝に至る前までを取り上げている。

この時代に、首都をカーブルに移している。なお、アフガニスタンの「建国」については、ドウッラーニー朝成立によるものとするか、1919年のアマーヌッラー・ハーンの「独立戦争」を持って成立したのかの議論がある。

「第3章」は、バラクザイ朝、第一次、第二次英ア戦争、グレート・ゲーム、ラフマン・ハーン、ハビブッラー・ハーンまでについて言及されている。

「第4章」は、第三次英ア(独立)戦争、アマーヌッラー・ハーンの近代化政策に当てられている。この時代、アマーヌッラーの外遊、諸外国との条約締結など、国外にも目を向けられている。

「第5章」。タジク人のカラカーニーの10カ月政権、ナーデル・シャー政権を取り上げる。

「第6章」若いザーヒル国王が即位、叔父たちの実質政権、将来大統領となるダーウード首相の登場、度重なる首相交代等が記述される。

「第7章 共和国の夜明け 一ダウード・ハーンの構想と課題」では、著者のムータット氏が、直接関与した時代を叙述したもので興味深い。しかも、王政崩壊、ダーウード時代、サウル革命、そして共産党時代、旧ソ連の侵攻、ナジブッラー政権とその崩壊(駐日大使時代を含む)に至るまで、政治の渦中にいた経験と考察は、長いアフガニスタンの歴史と重ね合わせて読むと、この国が置かれた地勢的位置と、多民族・多言語からなる国家が、周辺国や大国の波にもまれてきたか、また将来も続くことを想うと胸が痛むのである。

「終章 過去からの教訓と未来への希望」では、アフガニスタン史を振り返り、未来への展望が語られる。そこで、「アフガニスタンの歴史を振り返ると、そこには常に紛争と混乱に巻き込まれ続けた国家の姿が浮かび上がる。その主な要因として、部族間の対立、宗教的原理主義、そして外部勢力の緩衝があげられる」とし、安定的な国家としてこれらの克服が求められるとする。じつに途方もない課題である。

さて、私がアフガニスタンを考えるとき頭の片隅にあるのは、岩村忍の次の言及である。岩村は、『アフガニスタンの旅』(朝日新聞社)のなかで、ハザーラジャートのアシュタルライ地域を訪れた際、「これ(アシュタルライ)は東洋においても、最も隔絶、孤立した社会の一つであろう。これは東洋の中世紀がそのまま残存している社会である。(中略) アシュタルライのような『近代』を含まない社会はかつて見たことはない。しかもハザラ族の社会は決していわゆる未開社会ではない。中世のまま、ある時期に自然的条件によって発展が停止せしめられた社会と言っても良いであろう」。

この『中世』という言葉、ここではハザーラ族について述べているが他の民族でも同様だと考える。もちろん、カーブルなどの大都市には当てはまらないであろうが、都市を離れ地方を訪れればこのような感じを受けるのである。ただ、『中世』のままであるのは、決して「自然的条件」だけではないと考える。

かつて、「後進国」、「発展途上国」という言葉があった。つまり「西欧化」をめざすのが理想化されたのである。日本も「文明開化」に邁進してきたのである。

しかし、アフガニスタンでは、あくまで自分たちの文化・生活を大切に維持し

てきた。地方を訪れれば、「中世的」生活を見ることが出来るのである。アフガニスタンの未来が、「西欧化」ではない、独自の社会を進むことが出来る唯一の「国」なのである。そこが魅力なのだとおもう。

関根 正男

筆名はモハバット・セキナ。

アフガニスタン文化研究所副代表。

1975,77,78年にアフガニスタンを旅行。主な著書、訳文については、

『日本・アフガニスタン関係全史』編・著(明石書店)。

『アフガニスタンを知るための70章』共著(明石書店)。

『アフガニスタンのアフサーナ(民話)』第1集～5集の訳。

BBC のアフガニスタンに関する記事を 2014 年より文化研究所の HP に掲載中。

=====

翻訳者あとがき

「アフガニスタン史小景」の筆者であるアブドゥル・ハミド・ムータット氏（以下、敬称略）は、1978年4月のサウル革命によって成立し1992年4月、ムジャヒディーンによって倒されるまで続いたアフガニスタン民主共和国（最終的には国名変更によりアフガニスタン共和国）の副大統領を務めた人物である。アフガニスタン現代史最大の転換期となった民族民主主義革命のアフガニスタン統治は14年つづいた。うち10年間はソ連軍が進駐していた。

アフガニスタン史における政変のほとんどは武力による倒壊であり、前統治者は殺害か追放の憂き目にあってる。本連載の終章では「アフガニスタンは歴史上、権力の平和的移行をほとんど経験してこなかった。たとえば20世紀だけを見ても、1901年のハビーブラーハーン以降の国家元首10名のうち、実に7名が暴力によって命を落とし、残る3名は亡命を余儀なくされた」（ムータット）と書かれている。

4月サウル革命後のアフガニスタンの政変も戦乱による争奪劇だった。1996年のターリバーンによる権力奪取はムジャヒディーンとの国内戦争のさなか、まだ内乱が終わらないうちの一方的な宣言であったし、そのターリバーンをアメリカと北部同盟が打倒した2001年の3年後の2004年にアフガニスタン・イスラム共和国が建国されたときも、その後2021年8月に共和国が崩壊し再びターリバーンが復帰してアフガニスタン・イスラム首長国を打ち立てたときも、そうだった。

しかし、アフガニスタン共和国からムジャヒディーン政権への国家権力の移行は前政権（アフガニスタン共和国）の憲法にしたがい、肅々と執り行われたのである。その権力移行式典を取り仕切ったのはムータット元副大統領だった。なぜ副大統領が権力移行の責任者にならざるをえなかったのか。それは、権力を手渡すべきナジブラー大統領が任務放棄し敵前逃亡を試みたが失敗しカーブル市内の国連施設内に逃げ込み、大統領職を遂行しえなくなっていたからである。

ところがナジブラー元大統領はまだ大統領職が有効な逃亡前にムータットら閣僚を解任していたのである。残されたムータットら旧政権指導者らは国會議長とはかり、憲法の規定に則ってムジェヒディーンに正当に権力を譲渡すべく知恵をめぐらす。権力を渡すべきムジェヒディーンらと交渉を重ね、1992年4月29日に外国記者団も同席させ、新国家元首に指名されたシブガトゥラー・ムジャディディーに共和国憲法の規定に従って国家権力を移行する式典を挙行したのである。

つまり、ムータット元副大統領は、PDPA（アフガニスタン人民民主党）が樹立したアフガニスタン共和国の死に水を取ったのである。この迫真に迫る、歴史的にもまれだと思われる国家委譲劇を、ムータット元副大統領は、自らを主人公とする回想記『わが政府 かく崩壊せり』で詳述している。

本連載『アフガニスタン史小景』の終章は、数千年におよぶ、アフガニスタンを舞台にした諸民族と王朝と人民の革命の直近の総括であるとともに、そこからさらに始まる新しい攻防の歴史の序章ともなっている。だがこの序章は悲しくも痛ましい、冷厳な歴史の繰り返しでもある。

ムータット副大統領は、在日アフガニスタン大使として10年近くを過ごした日本につよい愛着をもっている。アジアの中で英米露帝国主義と戦って独立を維持した同じアジアの民族として愛着を隠さない。さらにムータット元副大統領は「アフガニスタンの歴史は、常に試練と逆境に直面しながらも不屈の勇気をもって立ち向かってきた国民の精神を証明する記録である」と歴史の新しい展開への確信を表明して本連載を締めくくっている。それはわれわれ日本人へのエールでもあるだろう。

最後に、本連載の監修をアフガニスタン文化研究所副代表で『日本・アフガニスタン関係全史』（2006年、明石書店）編者の関根正男氏にお願いした。アフガニスタン文化研究所は日本におけるアフガニスタン研究の第一人者のひとりである前田耕作先生が創立した研究所である。連載の内容において歴史のみならずアフガニスタンの社会・文化に対する造詣が必要であるとの配慮からである。また、翻訳にあたっては、各種のAIや検索サイトを活用したうえで『ウェップ・アフガン・イン・ジャパン』の野口壽一と金子明があたった。技術の

進歩に驚愕するとともに、それらをよりよく使うためのリアルな人智の重要性をも再認識した。とはいって、翻訳の至らなさはすべてわれわれ翻訳人にある。お気づきの点があれば遠慮なくご指摘をお願いしたい。

(野口壽一・金子明)

野口壽一

1980年8月 アフガニスタン民主共和国を現地取材
1981年8月 写真記録『新生アフガニスタンへの旅』上梓
1982年～1992年 「アフガニスタンを知る会」「日本アフガニスタン友好協会」結成
1988年 アフガニスタンを代表してならシルクロード博覧会出展
1988年～1999年 日本アフガニスタン合作映画『よみがえれ カレーズ』に原案、制作に参加
2021年4月 『ウェップ・アフガン・イン・ジャパン』創刊、現在に至る

金子明

1958年愛媛県生まれ
元テレビの派遣ディレクター 担当した番組は「朝まで生テレビ」「知ってるつもり」「ステーションEYE」「どうぶつ奇想天外！」「見える歴史」「おはなしのくに」など
現在は放課後児童クラブの補助員